

であるかの一端を知るに足ると考へる。貞觀十二年といへば阿羅本が來朝した時から三年を経過した時である。此の間に於て其の徒は新天地の唐に於て教義を宣傳するに當り、その教旨をかゝる語で要約することにしたものと思はれる。然らば何故に特に教旨の要約をかゝる語に求めたのであらうか。思ふにこれは唐の皇室の崇老の有様に鑒み、阿羅本以下其の徒の炯眼が新たに教旨を宣べるに當つて、機縁をこれに求めたのに外ならぬであらう。唐室の尊祖の觀念に基づく老子崇拜は、高祖の武德三年吉善行が羊角山に於て一老叟を見たといふ傳説を初めとし、有名な事實であつて、實に前記太宗の詔の發せられた前年なる貞觀十一年二月に、道士女冠の位置を僧尼の上に置くことを宣した詔<sup>⑩</sup>の中にも

況朕之本系起自柱下、鼎祚克昌、既憑上德之慶、天下大定、亦賴無爲之功、宜有改張闡茲玄化、自今已後、齋

供行立、至於稱謂、道士女冠在僧尼之前、庶敦本之俗暢於九有、尊祖之風貽諸萬葉、

と見えて居る。かく太宗が鼎祚克く昌え、天下大に定まる事を以て、老子の所謂上德無爲の慶功となし、改めて玄化を張らうとし、その爲に當時必ずしも自から信仰薄からなかつたと思はるゝ佛教に對してすら、その僧尼の位置を道士女冠の下に置くことにした時に於て、新たに教義の宣傳に従事するに至つた基督教士が、その教義の所縁を老子の教に求めようとするに至つたのは、時世に適合した賢明の態度であつたと認めざるを得ないであらう。要するに赫々たる皇威に依頼し、敏くも老子に機縁を求めて新宗教の天地を開拓せんとしたものに相違なく、こゝに於てか碑文載する所の、或は列聖の像を其の寺院に安置し、或は天題の寺額を賜ふたことなどを始め、歴代皇室との縁故の淺からなかつたこと、則天武後の時代に於て教運の沈淪したこと、玄宗時代に於て復興の運に會したこと、